

# 一年学年だより

No. 11【2月号】

令和6年1月30日発行

## 苦手を克服すると新しい世界が広がる

私は、小学生の頃趣味が読書であった。特にファンタジー系が大好きで、テストの点数が良かったときなどのご褒美では、いつも新しい本を買ってもらっていた。小学校高学年では古文にはまり、最初は漫画で読む古典から入って、図書館の本を読み漁った。しまいには原文の「平家物語」や「枕草子」の冒頭を暗記したり、百人一首の句を暗記したりするまでになるほど、国語が大好きだった。いつも学校の成績は国語が良かった。それに引き換え、算数は大の苦手であった。低学年の頃は九九が覚えられずに、四苦八苦したのを覚えている。親に教えてもらっていても、分からなくなるといつも「九九をやると頭が痛くなるんよね。」と言いつつ逃げている記憶がある。高学年になってから私を苦しめたのが、「百分率」「立体」……もはや意味不明だった。そして、5年生の時の算数のテストでなんと0点を取ってしまったのだ。そのまま中学生となり、負の数が出てきたときにはもう終わったなと思ったくらいである。それでも自分は文系だし、数学ができなくてもいいやと思っていた。



しかし、中学2年になったのをきっかけに、ふとやってみようかなと思い、自宅で個人塾をしていた母親に教わって、予習をして数学の授業に臨んだのだ。すると、「わかる」ではないか。感動した。「わかる」と「面白い」のだ。「またやろう」という気持ちになる。私はそこから数学が大好きになり、中学数学の教師になりたいと思うようになった。高校に入ってから数学はまた一段と面白かった。数学は学校でもかなりできていたが、それでも飽き足らず、ハイレベルな内容を教えてくれる塾にも通った。高3の時の数学Ⅲの定期考査はすべて100点だった。センター試験では9割以上の点を取り、得意なはずだった国語は大失敗をして5割強しかなかった。そんな私が選んだ大学は、2次試験が数学1本で受験できる愛媛大学理学部数学科。そして現在の職業は高校の数学教師。私の人生は苦手を克服したあの瞬間に大きく変わったのだ。

長所を伸ばすのも大切だが、苦手を克服する快感も経験してみしてほしい。きっと、新しい世界、新しい自分を見ることができる。

(109HR担任)

## 自立の心 培って

高校3年生の時だったか、体育の授業に遅刻したことがあった。前の授業の先生の手伝いで遅れたのだが、プールの更衣室で着替えていると体育の先生が入ってきて、「何で遅れているんだ」と叱られた。その先生は1年生の時に担当していただいた人で、その時は受け持ちではなかったのだけれど、とても厳しい先生で1年生の時は大変苦労したが、嫌いではなかった。その人が、「今の担当されている先生がうるさく言わないから遅れたのか？ お前はそんな人間ではないはずだ。」と言われた。もちろん僕はそんな人間ではないし、自分のせいではなかったからムカついた。続けて、「怒らなくて優しく見える人ほど、本当は厳しいんだ。」とも言われた。あれから30年すこし経ったが、色々と経験を重ねた僕は、あの言葉は真実だったと思う。

近ごろ、教師が行き過ぎた指導で処分されたという話をよく耳にするようになった。僕も指導にはかなり気を遣うようになった。暴力は論外だが、なかには生徒に意図が上手く伝わらず、「言葉の暴力」とされたものもあるだろう。そういった経験が僕にもある。「良薬は口に苦し」は今の世の中には通用しない。これは学校の中だけの話ではなく、社会でも同じことがおこっているはずだ。そうなる、相手がどのように解釈するかは分からないのだから、どうしても注意をすることを避けがちになってしまう。注意されなくなるということは、何かの間違いに対して自分自身で気が付かなければならないということだ。これはとても厳しいことだと思う。しかしそれが現実なのだから、今の社会は、君たちにとって非常に厳しい社会と言えるだろう。

そういった社会を生き抜くために君たちに必要なものは何かというと、松山中央高校校歌3番にある「自立の心 培」うことである、と僕は思うのだ。

(109HR副担任)